

科学研究費補助金（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	19107007	研究期間	平成19年度～平成23年度
研究課題名	資源利用と闘争回避に関する進化人類学的研究	研究代表者 (所属・職)	山極 寿一（京都大学・大学院理学研究科・教授）

【平成22年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○ A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究の目的は、「霊長類学、先史人類学、生態人類学の3つの異なる学問分野から、人類が示す資源利用とそれをめぐる闘争回避の方法がどのような進化の過程をたどってきたかを再構築し、人類に最も適した方策を検討する」ことである。

これまでにこの目的に沿った重要な進展があり、研究は概ね順調である。特に、類人猿とオナガザルの祖先の森林内での共存の可能性、ゴリラとチンパンジーの間に見られる補助食物の利用様式の相違、農耕民と狩猟採集民に見られる場所認知と所有の解決法の相違という知見は、従来の定説を覆すものとして高く評価できる。また、研究成果の社会・国民への発信もよく行われている。

一方、新たな取り組みであるストレスホルモンの分析、父系解析および血縁関係のDNA解析、食性の安定同位体分析が遅れている。また、生態人類学班の学术论文（英文）が不十分である。これらの課題については、今後一層の努力が必要である。3つの研究組織は本研究の強みでもあり弱みでもある。強みを活かして、得られた成果を各分野だけに留めることなく、それらを有機的に統合し、「狩猟仮説」を超える新たな仮説の提唱に期待したい。

【平成24年度 検証結果】

検証結果	研究進捗評価結果どおりの研究成果が達成された。
A	<p>霊長類学、先史人類学、生態人類学の3分野の共同作業によって、生態資源と社会資源をめぐる葛藤について包括的に検討し、新たな仮説と用語の統一を目指した野心的な研究である。各分野で多くの成果を挙げるとともに、頻繁にシンポジウムを開催することによって、3分野間での問題意識の共有がなされている。学术论文のみならず、書籍刊行、公開シンポジウム及びウェブサイトの維持・更新など社会に対する成果の発信も引き続き行われている。研究進捗評価で指摘されたストレスホルモンの分析、父系解析及び血縁関係のDNA解析については学术论文刊行に至っていないものの、学会発表などで着実に成果を出しているものと判断できる。一方、研究進捗評価で指摘された生態人類学班の英文の学术论文刊行などが遅れたままの状況にある。また、新たな仮説の提唱にも至っていないと判断する。従って、優れた成果を挙げていることは認めるが、研究進捗評価を変更する根拠は見いだせなかった。</p>